

令和7年度 国際総合科学群教学 IR 実施報告書

1 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング開催実績

- 第1回 令和7年6月9日
- 第2回 令和7年9月16日
- 第3回 令和7年12月25日
- 第4回 令和8年3月13日

2 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキングメンバー（敬称略）

ワーキング長	土屋 隆裕
ワーキング長補佐	橘 勝
国際教養学部	大島 誠、小野寺 淳、江上 園子
国際商学部	和田 淳一郎、白石 小百合、橋本 倫明
理学部	佐藤 友美、大関 泰裕、北 幸海
データサイエンス学部	土屋 隆裕、大西 暁生
事務局	森谷学務・教務部長、佐藤教育推進課長、大磯学術企画担当係長、毛利学術企画担当、梶原学術企画担当

令和7年度 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング分析結果

1 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

<取組概要>

平成30年度より「新入生アンケート（入学時実施）」、「カリキュラム評価アンケート（卒業時実施）」、「卒業生アンケート（卒後3年に実施）」の3つのアンケートに、本学の教育ポリシーに関する共通の設問※を設定し、回答結果の分析を行った。分析結果は各種会議で報告を行い、カリキュラム改善の検討を支援した。

また、分析を開始した平成30年度～令和3年度の入学者がすでに卒業しているため、新入生アンケート、カリキュラム評価アンケートの対象者を揃えたクロス集計を行い、経年での変化を分析した。

※「課題発見・問題解決力」「グローバルな視野」「豊かな教養」「確かな専門性」

(分析内容)

- (1) 各アンケートをつないだ経時分析（令和7年度実施の調査結果から分析）
- (2) 平成30年度～令和3年度入学者の入学時、卒業時アンケートの比較分析

<分析結果>

- (1) 過年度の分析結果含め、入学時には期待値が高いものの、卒業時の成長した実感と卒後3年時の役立っている実感は、徐々に下がっていく傾向が見られている。中でも「グローバルな視野」については、入学時の期待に比べて卒業時・卒後3年時の結果が大きく下がる傾向にある。

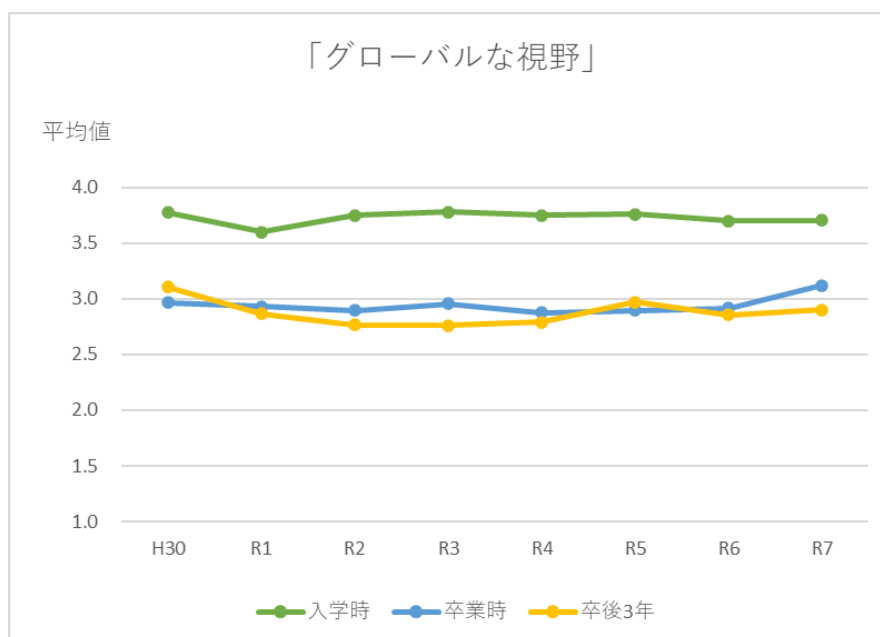


図1) 「グローバルな視野」の経年比較

- (2) 平成 30 年度～令和 3 年度の入学者において、入学時と卒業時の回答をつないだ分析を行ったが、(1)での経時的な分析と同様の結果が得られた。

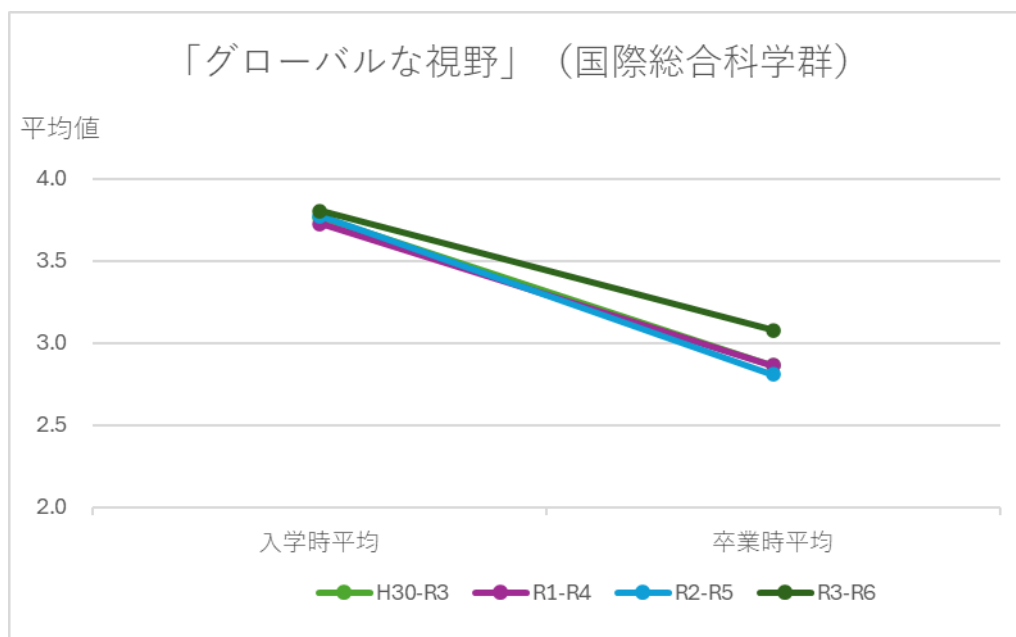


図 2) 同一対象をつないだ「グローバルな視野」の入学時・卒業時比較

2 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応

<取組概要> 教育の質の保証を行うために、特に重要項目と考える 3 つの観点について、検討を進めた。教学 IR 検討 WG にて分析した結果を各学部会議で報告・共有し、学部独自の課題の洗い出し、改善に向けた検討が進められた。

<教学 IR 検討 WG で取り組む 3 つの観点>

- (1) 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」
- (2) 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」
- (3) 学修成果の可視化

(分析内容)

- (1) 授業外学修時間の推移
※授業改善アンケートにおける授業外学修時間の設問について、以下 6 段階の回答割合を集計分析
⑥ 4 時間以上、⑤ 3 時間以上 4 時間未満、④ 2 時間以上 3 時間未満、
③ 1 時間以上 2 時間未満、② 1 時間未満、① ほとんどしなかった
- (2) 令和 7 年度科目における成績評価に関する分析
- (3) 【YCU-Board ポートフォリオ機能】 YCU 指標を用いた試行的な分析

<分析結果>

- (1) 大学設置基準の単位に関する条文「1単位の授業科目を45時間の学習を必要とする内容をもって構成すること」を踏まえ、正規の授業時間に加えて、学生の授業外学修時間数の確認を行った。

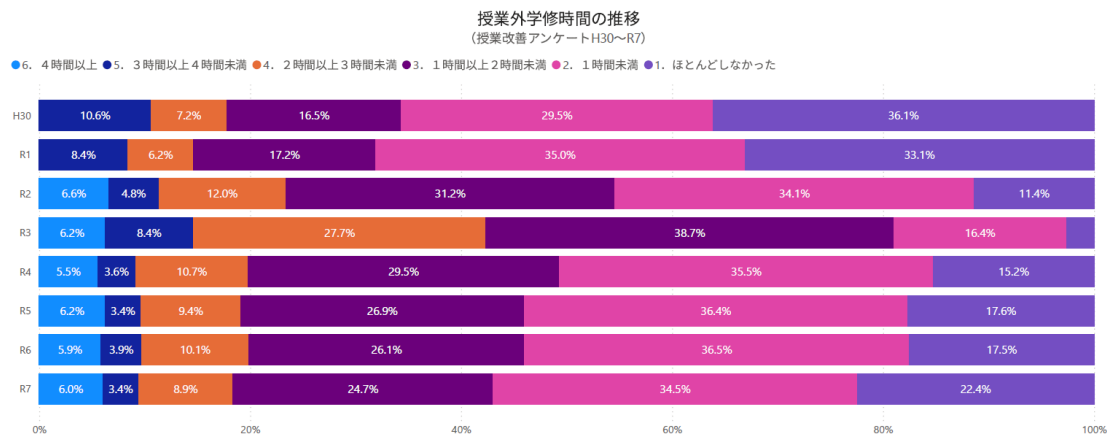


図3) 授業外学修時間の推移

令和元年度から令和2年度にかけて、「③1時間以上2時間未満」の回答割合が大きく増えていることで、授業外学修時間全体が増えており、令和7年度についても令和2年度と同様の傾向であった。しかし、令和2年度をピークに徐々に減少傾向ではあり、「②1時間未満」、「①ほとんどしなかった」の回答割合が増えていることが確認できた。(令和2年度比13.9%増)

(2) 令和7年度の成績評価結果を分析し、成績評価が適切に行われているか確認を行った。

- ・分野別に GPA 平均値を集計し、GPA 平均値が高すぎるまたは低すぎる分野・科目の確認を各学部で行った。
- ・成績登録者数によって平均値に差が見られることから、成績登録者数と GPA 平均値を散布図にまとめ、評価が偏っている科目の確認を各学部で行った。
- ・各学期の集計結果だけでなく、経年変化の集計を詳細に行い、継続して成績評価が適切に実施できているか確認できるようにした。

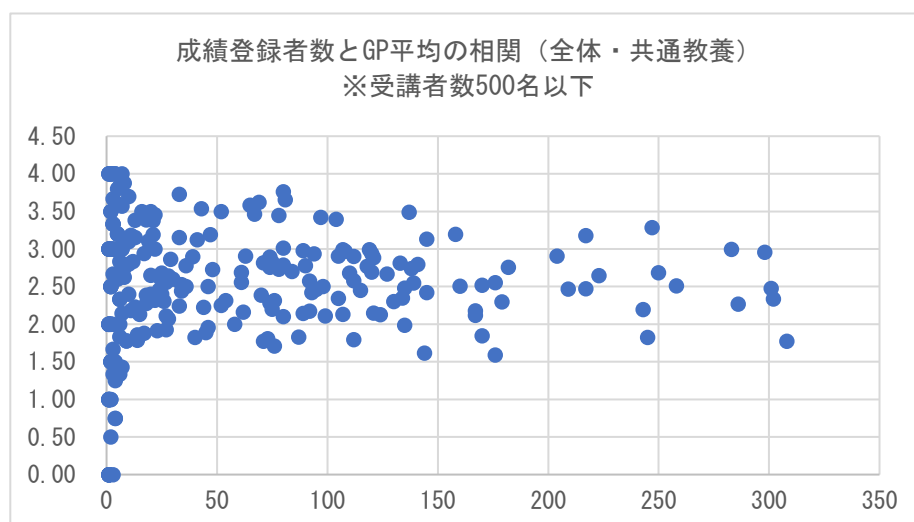


図4) 成績登録者数と GP 平均相関 (共通教養科目)

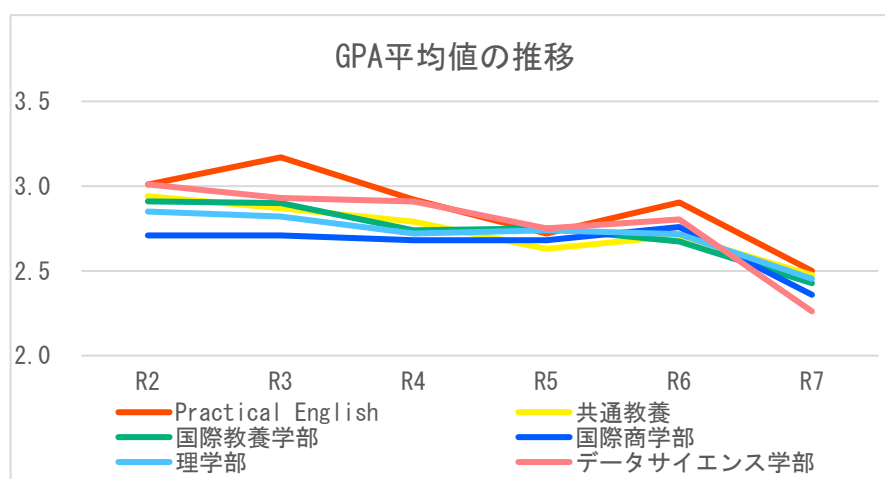


図5) GP 平均値 (各学部・共通教養・Practical English)

(3) 令和4年度から導入した LMS (YCU-Board) ポートフォリオ機能「YCU 指標※」を用いた学修成果の分析について、以下2つの分析を昨年度から継続して試行的に実施した。

※本学の学修を通して備えるべき6つの学修成果項目「論理的思考」「情報リテラシー」「国際的視野」「資料作成力、プレゼンテーション」「地域貢献」

「各学部独自項目」

(分析内容)

a 入試区分と YCU 指標（学修成果）の相関分析

b 留学経験と YCU 指標（学修成果）の相関分析

a、b ともに令和 6 年度 4 年次生の学修成果との掛け合わせを行い分析した。a では、推薦型選抜の学生（「論理的思考」を除く）、b では留学経験が有る学生の学修成果が高い傾向にあり、今後は学部毎の経年や該当区分の学生の志向・特徴の分析を進めていく。

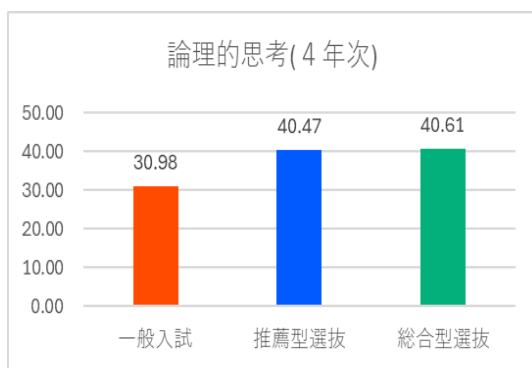


図 6) 入試区分による YCU 指標への影響

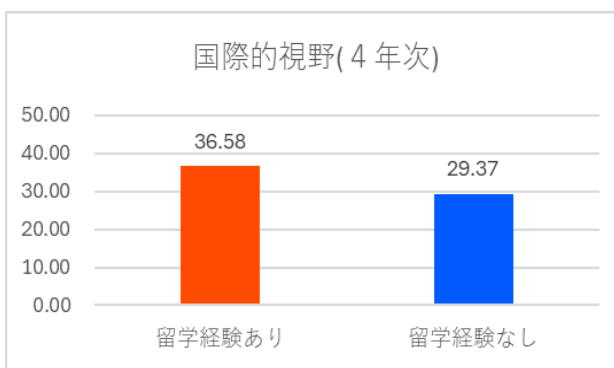


図 7) 留学経験による YCU 指標への影響

3 全国学生調査の実施及び分析

<取組概要>

全国学生調査は令和元年度から令和 6 年度までの計 4 回、試行で実施されており、令和 7 年度から本格的実施となった。令和 7 年度は当該年度調査の設計と実施、また本学の調査結果の集計を行った。調査の設計にあたっては、「教学 IR 学生プロジェクト」を発足し、学生視点での調査結果の報告会を実施した。

なお、本学の調査結果と全国の大学との比較分析については、令和 8 年度に文部科学省から調査結果の公表が出次第着手する予定である。

(取組内容)

- (1) 令和 7 年度全国学生調査の本学結果の集計
- (2) 「教学 IR 学生プロジェクト」による分析と報告

<分析結果>

- (1) 前回調査の分析結果により、全学的な課題として取り上げた項目について、本学の推移を確認した結果、ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導、インターンシップの満足度について改善が確認できた。以下は、「有用だった」を 4 点、「ある程度有用だった」を 3 点、「あまり有用ではなかった」を 2 点、「有用ではなかった」を 1 点として算出した本学回答の平均値を示している。

- ・「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」

令和 7 年度：2.50、令和 6 年度：2.53、令和 4 年度：2.52

- ・「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」

令和7年度：2.54、令和6年度：2.46、令和4年度：2.44

・「インターンシップ（5日間以上）」（満足度）

令和7年度：3.38、令和6年度：3.36、令和4年度：3.05

(2) 以下の3つについて教学IR学生プロジェクトによる分析を行った。

ア 本学と全国の比較

イ 成長の実感にかかわる能力

ウ 本学の学生における精神状態の分析

ア 本学と全国の比較

本学の強みと弱みの把握を目的として、令和6年度全国学生調査の問1・問2・問3・問4の回答を点数化し、本学と全国の比較を行った。点数化にあたっては、問2の「経験していない」という回答は平均値を求める際に除外した。

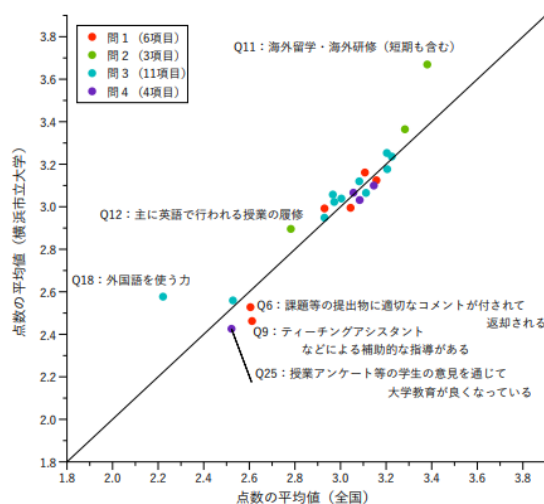


図8) 点数の平均値の比較（本学全体と全国）

分析の結果、本学の強みとして挙げられる上位3項目は「外国語を使う力」「海外留学・海外研修」「主に英語で行われる授業の履修」、弱みとして挙げられる上位3項目は「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」であることを確認できた。

イ 成長の実感にかかわる能力

どのような知識や能力を身に付ければ大学教育による成長を実感できるのか、さらに、そのような知識や能力を身につけるにはどのような授業を行えばよいのかを探ることを目的として、令和7年度全国学生調査の本学回答データを使用し分析を行った。

専門分野に関する知識・理解	.374	.486	.614	.527	.355	.410
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	.345	.471	.611	.451	.406	.349
文献・資料を収集・分析する力	.287	.400	.507	.314	.361	.462
論理的に文章を書く力	.309	.447	.481	.311	.368	.415
人に分かりやすく話す力	.280	.442	.513	.273	.349	.486
外国語を使う力	.255	.315	.433	.252	.381	.304
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	.268	.322	.458	.329	.322	.351
問題を見つけて解決方法を考える力	.357	.439	.569	.370	.344	.454
他者と協働する力	.296	.396	.598	.339	.364	.329
幅広い知識、ものの見方	.317	.449	.574	.387	.396	.411
異なる文化に関する知識・理解	.274	.415	.448	.319	.308	.441
	国際教養学部	国際商学部	理学部	DS学部	医学科	看護学科

図9) 知識・能力と成長の実感との連関係数(2年生)

専門分野に関する知識・理解	.379	.465	.439	.516	.439	.471
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	.428	.408	.318	.489	.558	.377
文献・資料を収集・分析する力	.383	.318	.388	.433	.545	.296
論理的に文章を書く力	.330	.391	.359	.500	.485	.381
人に分かりやすく話す力	.465	.376	.377	.523	.396	.315
外国語を使う力	.286	.317	.350	.352	.350	.240
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	.188	.333	.351	.449	.434	.352
問題を見つけて解決方法を考える力	.390	.435	.396	.554	.572	.355
他者と協働する力	.411	.325	.383	.502	.455	.490
幅広い知識、ものの見方	.380	.392	.404	.580	.533	.418
異なる文化に関する知識・理解	.360	.349	.332	.400	.439	.237
	国際教養学部	国際商学部	理学部	DS学部	医学科	看護学科

図10) 知識・能力と成長の実感との連関係数(卒業年次生)

図9と図10は、学年と学部別に、成長実感項目と知識・能力項目との間の関連の強さを求めた結果である。図中の数値はクramerの連関係数であり、値が1に近いほど成長実感項目との関連が強いことを示す。

学部によって違いはあるものの、概して「専門分野に関する知識・理解」「将来の仕事につながる知識・スキル・態度・価値観」「問題を見つけて解決方法を考える力」「幅広い知識、ものの見方」は成長の実感と強く関連している。一方で、「外国語を使う力」や「数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」は必ずしも成長の実感とは強く関連していない。

ウ 本学の学生における精神状態の分析

令和6年度・令和7年度全国学生調査の本学独自設問の回答結果を用い、孤独感と精神的苦痛の間にどのような関係性があるのかを明らかにすることを目的として分析を行った。図11は孤独感指標、図12は精神的苦痛指標が令和6年度から令和7年度にかけてどう変化したかを示すグラフである。

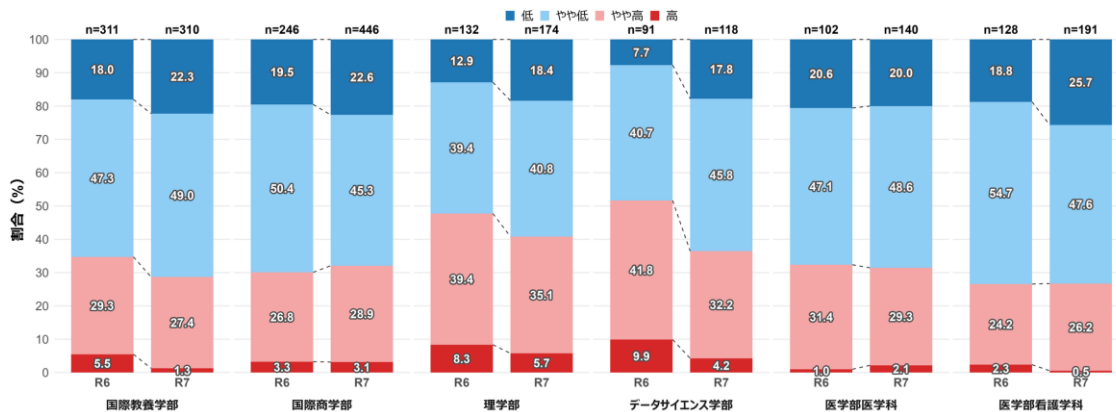


図 11) 孤独感指標 (年次・学部別)

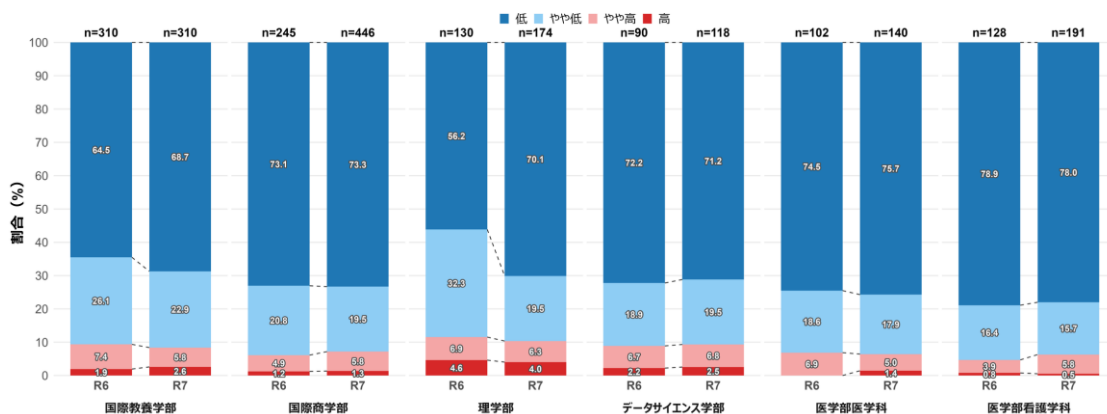


図 12) 精神的苦痛指標 (年次・学部別)

孤独感指標は、全体として令和6年度から令和7年度にかけて「低」が増加し、「高」が減少した。

精神的苦痛指標は、全体として令和6年度と令和7年度の分布差は大きくなく、令和7年度では「低」がやや増え、「やや低」が減少したが、「やや高」および「高」の割合はおおむね横ばいであった。学部別にみると増減が混在しているが、変化幅は小さく、年度間で明確な一方向の変化があるとは言いにくい状況であった。

孤独感と精神的苦痛の間には一方が高まると他方も高まるといった一貫した関係性は認められず、両者の間に明確な関連があるとはいえないことが明らかとなった。

4 分析結果の報告

各分析結果について各種会議にて報告・共有し、各学部におけるカリキュラム等の検証や改善を支援した。

<報告・共有した会議体>

- ・学長諮問会議 (年1回)

- ・ 高等教育推進センター教学 IR 部門会議(年 3 回)
- ・ 各学部教授会 (適宜)
- ・ ICT 推進委員会 (年 2 回 ※データ活用推進部会として報告)

5 今後の課題

(1) 各学部研究科の自己点検評価・認証評価の支援のための教学 IR の推進

第 4 期大学機関別認証評価に向け、中央教育審議会大学分科会質保証システム部会「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について」の審議の結果、令和 6 年 4 月に認証評価に関する省令が改正され、「学修成果の把握と評価」という項目が大学評価基準に追加され、本学においても組織的な取り組みの実施と自己点検評価が必要となる。

また、令和 7 年 2 月に出された中央教育審議会「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)」においては、今後の認証評価において、従来の機関別評価(大学の教育研究等の総合的な状況)ではなく、学部・研究科別の評価とすること、また、学生が在学中にどれくらい力を伸ばすことができたのか等を含む、教育の質を数段階で評価する新たな認証評価制度への移行という方向性が示されている。今後、各学部・研究科ではそれぞれの 3 ポリシーに基づいた教育の質保証が求められることとなる。

今年度の教学 IR 検討ワーキングでは、「学修成果の把握と評価」に関する取組の強化に加え、今後、学部・研究科での 3 ポリシーの点検に必要なデータ提供を行うための評価指標を検討するなど、モニタリング&レビュー設計の支援を行う。

(2) 学内収集データの把握、取得データの整理について

本学で実施しているアンケートは業務の必要性に基づいて各部署で実施されており、学生から取得しているデータの全体像が十分に把握されていない。また、取得データの活用という点でも、各部署での管理下におかれているため、横断的な分析や検討が進まない状況となっている。そのため、各部署が実施するアンケートや保持している情報の把握を進め、ダッシュボードの形式で相互に閲覧・活用できるよう整理を図る。